

特別寄稿

痛みを伴う環境対策の時代

～途上国の生活体験から
現代日本のごみ問題を考える～

(財)日本環境衛生センター環境工学部

大澤 正明

はじめに

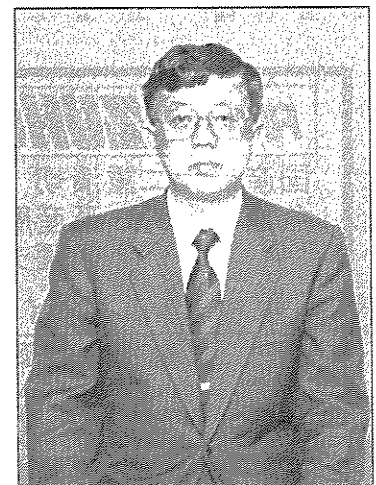
JICA（国際協力事業団）の固形廃棄物担当専門家として二年間のインドネシア生活を体験し、帰国後すでに一年余が経過した。

その間、私は二種類のカルチャーショックを経験した。ひとつは言うまでもなく途上国の生活レベルや生活様式に対する驚きであり、もうひとつは途上国生活体験者として見た日本の生活・社会様式に対する違和感である。

前者は時を経るにつれ、思い出として風化しつつあるが、後者は時と共にますます私の中で大きくなっていくような気がする。それは環境問題というところ現在の対策に対する懐疑であり、一種の絶望感である。はじめ、それが何であるのか理解できないまま苛立ちだけが先行していたが、次第にぼんやりとはあるが形になってきたような気がする。

そのことを、インドネシアの生活レポートという形で書いてみたのだが、書くうちにいつか「痛みを伴う環境対策」という言葉が出てきた。

たぶん、この言葉が、帰国後一年半経過した現在の私自身の結論かもしれない。



1 衛生を考える

「環境衛生」と名のつく組織に長くないながら、いまだかつて一度も「衛生」という言葉を好きになつたことがないような気がする。

一九七三年という、公害問題をまだ引きずっている時に廃棄物を相手にする職に就いたせいか、廃棄物処理は公害対策、あるいは環境対策の一環であると思つていた。思いたかつたというべきかもしれない。はつきり言えば、自分の職業は環境をよくする仕事だと自身に思い込ませることにエネルギーの大半を費やしてきたような気がする。

二年間のインドネシア生活で、私自身が得た最大の収穫は、「衛生」という言葉に対するアレルギーがなくなつたことかもしれない。たしかに向こうの衛生状態はすさまじいばかりだった。

まずは川の水。透明度がすこぶる低いのは土質の問題もあるのでしておくとして、同じ場所ですんちと歯磨き、水浴、水泳をいっしょにするというのは、やはり見ていておぞましいものがある。

玄關脇に据えられたコンクリート製のごみ箱の中にごみ袋を放り込んだ途端にねずみが飛び出すということもよくあるし、道路にね

ずみの死骸がゴロゴロ転がっているのも日常茶飯事。

ねずみと猫が共生しているという雰囲気も気持ちのいいものでない。ねずみを追いかけない猫と、猫を恐がらないねずみ、どちらもすごいなあと妙に感心したものだ。あるいは、また、ねずみと人間の共生関係というのもしかにあつた。隣近所のお手伝いさんたちと道路脇に座り込んで話していると、小さなねずみが横でチヨロチヨロと遊んでいる。私はもちろん大袈裟に騒ぎたてるのだが、彼らは平然と手の甲で払いのける。

ありの恐怖というのものもある。床にクッキーの滓でも落としていようものならアツという間にありの黒山。小粒なありなので可愛いと言えはいえるのだが、なにしろ土足で所かまわず歩き回るのだから不潔きわまりない。いつだつたか、食卓に群がっているありの行進の元をたどつてみたら九官鳥の籠の中。九官鳥の大ぶりで柔らかなめの糞がにお気に入りらしく、糞の中を縦横無尽に走り回っている。思わず吐きそうになつてしまったものだ。それ以来、ありがたしでも付いた食べ物は口にしなくなつたのだが、インドネシアの人たちは平気。手で払いのけるか、息を吹きかけるかして取り除き、気楽に口にしている。

そんな光景を日常的に見ていると、衛生はたしかに人間の命の根源に係わる問題だとい

ことをつくづく感じてしまう。まずは川の衛生管理、そして排水の処理、ごみの処理。だから、今では廃棄物処理の基本は衛生の確保であるということをも身をもつて感じているつもりではある。

しかし、私は、ここでは、敢えて、「日本のごみ問題は衛生から卒業した」¹⁾という前提で話を進めたいと思う。そう考えたほうが現在の日本のごみ問題を考える場合、議論の座りがいいと思うからだ(図1)。

衛生を卒業したという前提で考えていくと、二つの疑問が浮かぶ。

一つは、「衛生を確保したことが正しい選択であったかどうか、それにより人々の生活がよくなつたのか」ということだ。

私の赴任中にバリ島の日本人観光客が立て続けにコレラにかかるという騒ぎがあつた。不思議なのは感染するのは日本人だけで、インドネシア人はもとよりバリをこよなく好むオーストラリア人観光客にも発病の報告がないことだつた。当然、日本人が集まればこのミステリーが話題になる。

ある人は日本人の食生活に問題があるという。日本人はいついかなる時も日本食に固執するから、こんな南国にきても刺身があればついつい手を出してしまう。刺身を食べる習慣のない者が調理した刺身に衛生管理を求めらるほうがおかしいのだ。

またある人は、インドネシアの場合、検査が杜撰だから、たとえコレラで死んだからといって結局は原因がわからずに終わってしまうのだという。

バリ島に何度か行ったことがある人はこんなことを言う。

「そらあ、オーストラリア人はすごいよ。浜辺で一日中ジーツと日光浴してるんだよ。よく退屈しないなと感心するのだが、聞いてみると、連中は一カ月とか二カ月とかそういう単位で遊びに来ているんだね。そこへいくと我々日本人は数日間の日程で、ビーチで遊んで伝統芸能を勉強して、おまけに山のようなお土産を買いこむんだから、疲れはてるのは当たり前。疲れたところにコレラ菌が入り込んだらいちごころさ」

「空飛ぶ寄生虫」という本によると、そういった理由のほかに、日本人の過剰なまでの無菌体質をあげている。極端に清潔な社会に暮らしていると、菌に対する抵抗力が落ちるのだという。

そういえば、腸チフスという病気にしても、とても恐ろしい伝染病であると子供の頃に教えられた記憶があるが、インドネシアの人たちを見ていると、チフスは病気のうちに入らないのではないかという気さえしたものだ。滞在中の二年間で私の知人六人がチフスにかかったが、早い者で三日間休んだだけで出勤

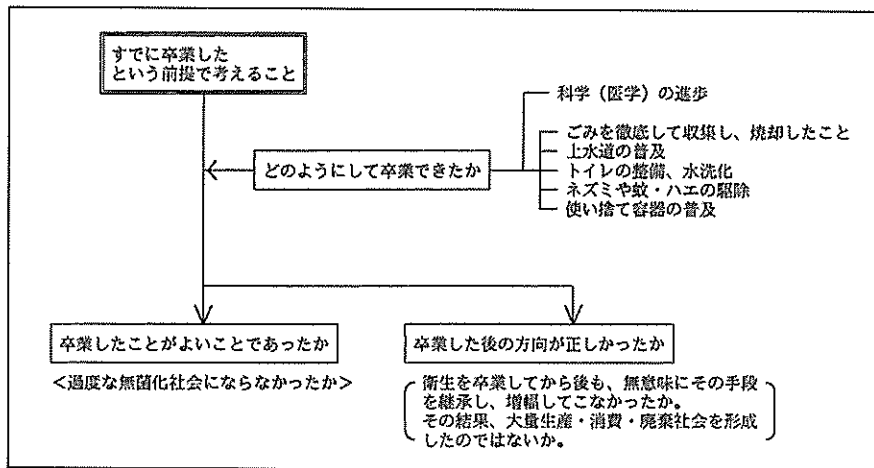


図1 ごみ問題と衛生

普段は決して勤勉な人たちではないのだから、これはもう休む理由にならない病気だと思なされると判断するしかない。

〇―157がなぜ、これだけ猛威を振ったのか、私にはその理由はわからないが、先の「空飛ぶ寄生虫」では、抗生物質の乱用や抗菌グッズの氾濫が原因の一つではないかとの私見を紹介している。

衛生もほどほどにといったところかもしれない。

さて、衛生に関する二つ目のキーワードは、衛生を卒業した後の方向が正しかったのかということである。

まず、私たちはどのようにして衛生を卒業できたのだろうか。

もちろん、医学の進歩や保健所の充実が衛生状態の向上に大きな貢献を果たしたことは言うまでもないが、環境衛生部門の視点から考えてみると、たとえば、ごみを片っ端から収集し焼却してきたこと、排水処理・トイレの整備、上水道の普及に、薬剤を使った衛生害虫の駆除、使い捨て容器の普及にラップの使用。つまり、天然資源を消費し、水を大量に使い、リサイクルに不熱心だったこと。

衛生状態を向上させるためには、おそらく、それはある程度、許されることだったのだろうと思う。しかし、問題は衛生を確保した後、その手段だけを野放図におそらく無反

途上国の現状

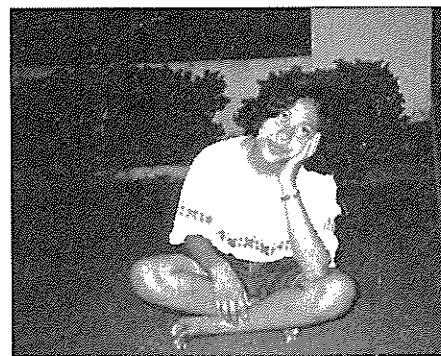


ごみ集積所のコンテナ。収集車の数が不足しているため、ごみが溢れかなり不潔な状態

省に増幅させていっただろうことである。
次項では、そういったことをもう少し具体的に考えてみたい。



我が家のごみ箱。ねずみの巣。「害虫対策のために鉄製の蓋をつけるべきだ」と主張する者もいれば、「そんな物をつけても一夜のうちに盗まれてしまう」と言う者も



夕暮れ時、道路に座り込んでおしゃべり。ねずみやごきぶりが現われても驚かない

2 豊かさ

しあわせ気分

インドネシアに赴任していた二年間、私は「豊かな生活に飢えている人々」をたくさん見てきた。しかし、いま日本に帰ってみると、「しあわせな生活に飢えている人々」に頻繁に出会っているような気がする。

帰国して一番戸惑ったのは、日本人のツルンとして無表情、無関心な顔つきである。このツルン顔は、休暇でシンガポールに行った時にもよく見かけたので、経済指数に比例するのかもしれないが、相手が何を考え、何を望んでいるのか読めなくて、戸惑ってしまうことが多いのだ。「なんて付き合いにくい国民だ」と内心罵るような状態が二、三カ月も続いたろうか。

そこへいくと、インドネシア人はすぐぶるわかりやすかった。

ジャカルタの路上にたむろする人々。道行く人にも今にも飛びかからんばかりの泥棒顔の男たちや、男を値踏みするかのような娼婦顔の女たちの眼差し。そういった極端な人々でなくとも、笑顔を見せれば目一杯の笑顔で返してくれるし、見せなければギョロツと睨ん

だま愛想がない。

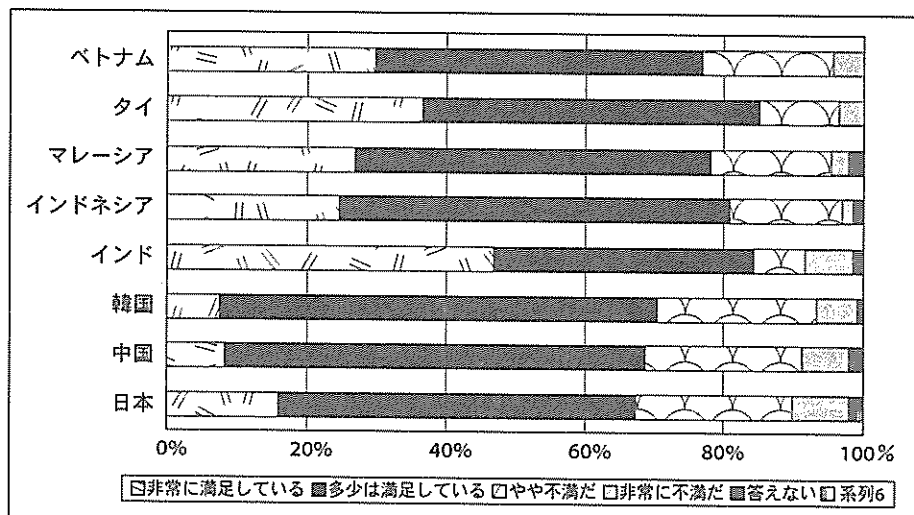
ジャカルタの路上を歩いていると、人の命の軽さに憤りをおぼえることが多い。

車体が傾くほどに客を詰め込んだバスが猛スピードで駆け抜ける。ドアを開け放しているの、時とすると車掌が転落し、もがき苦しんでいる側をやはり別の車が猛スピードで駆け抜ける。その車の洪水の中を縫うようにして横断する人々。何よりもおぞましいのは、人の命の値段の安さ。たとえ人を引き殺したとしても、日本円にしてせいぜい一〇万円もあれば足りるという。私も車を購入した際、日系企業の保険に入ったのだが、対人保険よりも対物保険のほうがはるかに高かった。

こういう途上国の様子は私たちからみれば決して楽しいことではない。可哀想だと思っし、早く私たちのような生活レベルにしてあげたいと思う。

しかし、そういう思いをあざ笑うかのようデータがある(図2)。アジアの主要国民に対するアンケート調査の結果であるが、現在の生活に満足している比率は、日本よりも東南アジアのほうがはるかに高い。

お金がなくとも、命の値段が安くとも満足できる生活感覚とはどんなものだろうか。それは、私たちにとって教訓となり得るデータであるかもしれないが、おそらく、現代日本人の多くはこの結果を深刻に受けとめること



出典) 読売新聞、平成8年9月19日

図2 現代の生活に満足しているか

はしないだろう。『自分をしあわせでないと感じ、自分自身の生活に満足できないと表現すること』がひとつのファッションであり、知的なステータスシンボルとすらなりつつある私たち日本人にとって、このデータは不思議でもなんでもない。むしろ、誇りですらあるのかもしれない。

「だから、途上国の連中はダメなんだよ」という声が聞こえてきそうな気がするのだが、考えてみれば、自身の生活に満足することが愚かなことで、不満を持つことが正義であるという考え方は、すこぶるわかりにくい。「こういう意識が現代日本の繁栄を支えてきたのだ」というのが私たちの言い分ではあるのだろうが、環境問題として見た場合、それはすでに時代遅れの考え方といってもいいのではないか。

そういった、われわれ日本人が信じている勘違い、時代遅れの意識ファッションは別の面から見ることができると。

たとえば、われわれ日本人の中でも改革派を認じ、進歩派を掲げる者の多くは、金や物を重視してきた歴史を恥ずかしいと思っている。「近頃、心の値打ちが軽くなった」と感じてもある。「物よりも心を」という標語を掲げること躊躇もない。物にこだわる人々を軽蔑することもできる。

しかし、問題は『心重視』、『物軽視』の中身

だ。

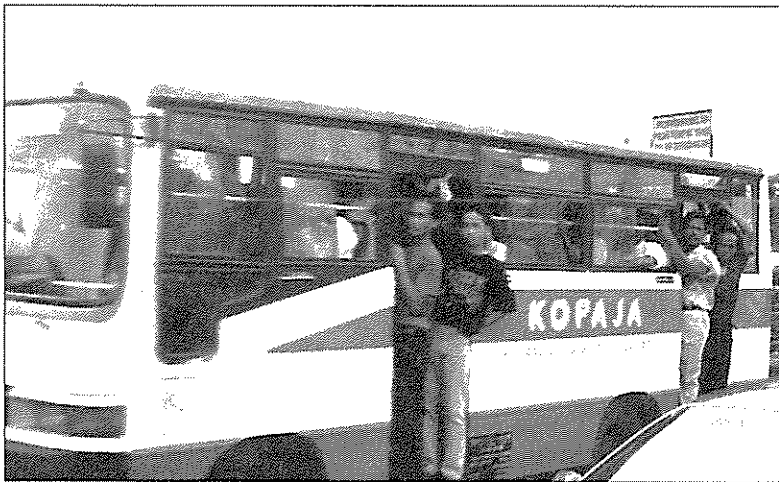
もし、過度の『心重視』が過保護を育み、方向を見失った若者がイジメに走るとしたら、あるいは、過度の『物軽視』が物を大切にしない風潮や大量生産、消費、廃棄の社会現象を育んできたとしたら、私たちはもう一度、現代日本の価値観を見直さなければならないだろう。

衛生状態のレベルを計る指標に乳児死亡率（一才未満の乳児一、〇〇〇人に対する死亡率）がある。たとえば、日本の場合、四人で

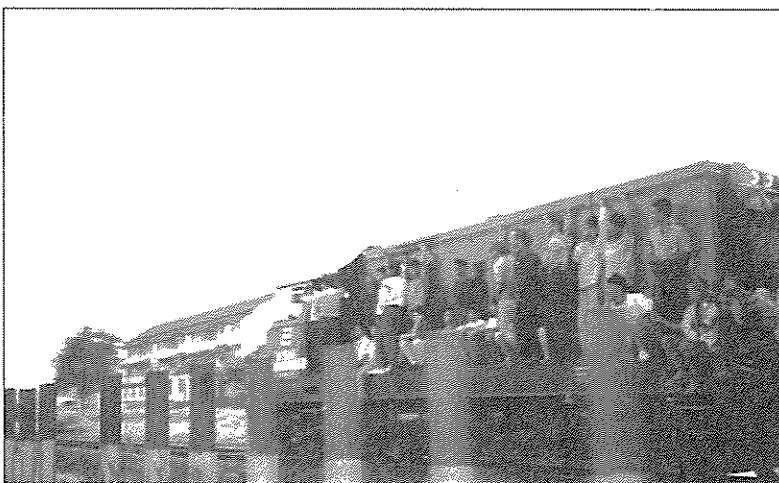
あるのに対し、インドネシアの場合、五六人（いずれも一九九三年）。十数倍のこの差が、日本の衛生対策の勝利の証であると言えるであろうか。

たとえば、下痢で生後三カ月目にわが子を失うことと、中学生になった子供をイジメで失うことと、親として見た場合、どちらがより不幸なことだろうか。

帰国早々に、イジメ自殺の新聞記事を目にした時そんなことを思った。私が、敢えて、『衛生対策は終わった』と叫びたい所以である。



ぎゅうぎゅう詰めバス。カーブを曲がりそこねて横転したという噂をしばしば耳にした



機関車の外枠に掴まり無賃乗車。「転落することはないのか」と聞くと、「よくあることだ」と平然

3 贅沢と便利

現代の環境問題を考えるとき、私たちのライフスタイルの中で二大巨悪としてやり玉にあげられる「贅沢」と「利便性」志向。

どちらがより悪で、どちらから先に懲らしめていくべき対象か。

それを考える前に、「贅沢」と「便利」の中身をいまま少し整理しておこう。

贅沢な品物といえば、たとえばブランド物、新型家電製品、ゆったりした応接セット。概念としては、大きい、新しい、値段が高い、心地よい、気分がいい。

一方、便利な製品は、たとえばプラスチック製品、アイディア小物。つまり、安い、簡単、早い、手がかからないという概念。

デパートは贅沢の見本市だろうし、スーパーは便利の万能箱だろう。さらに、グルメの旅は贅沢で、ファーストフードは便利の極み。

ごみ問題の側面から、もう少しわかりやすい例をあげると、「過剰包装」は贅沢で、「買い物袋」や「PETボトル・紙パック」は便利。

あげてみればきりがながないが、私たちが日常的に出すごみで「便利」と「贅沢」の代表格は、「プラスチック」と「紙」であろう。プラスチックがここまで普及したのは、私たちが利便性

を追求した結果であるし、紙が溢れているのは裕福な経済力の証である。

図3はGNPと紙消費量の関係を示したものであるが、かなりはつきりした相関が認められる。後に述べるように、エンゲル係数がある経済レベルで頭打ちになっていることと比べると、紙は経済レベルに比例してコンスタントに増えているのが特徴である。

インドネシアの紙消費量は日本の二四分の一（一九九二年）、ほぼGNPの差に比例している。具体的な数値でいうと、一人一日二四gであるが、我が国の毎日の新聞に紛れ込んでいるチラシ広告の重量が平均約一〇〇gであることを考えれば、絶望的なまでに少ない、あるいは、日本は絶望的なまでに多いと言えようか。

それに比べれば、プラスチックの使用量は決して日本に大きく劣るということはない。上水道の普及が未だ不十分で水質も飲料に適さないためか飲料水用のPETボトルは街中に氾濫しているし、スーパーのプラスチック袋もかなり乱雑に使われ捨てられている。

こう見ていくと、便利な品は経済力にかかわらず使われるもので、使用自粛するとすればまずは贅沢な物からということになるのであろうが、それすらかなり危なっかしいという場面にたびたび出くわしたものだ。

インドネシア人の包装好きといったら並み

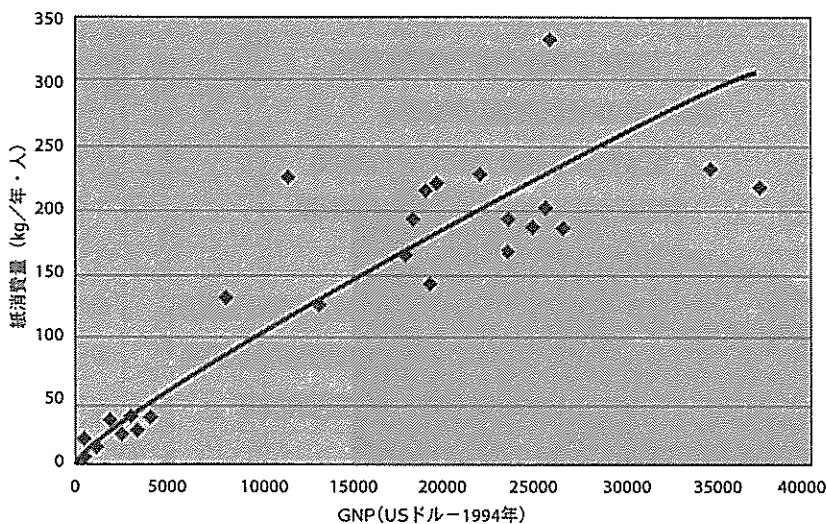


図3 紙消費量とGNP

ではない。ちよつとしたデパートや小物売り店ならば必ずといっていいほどラッピングコーナーがある。それも、テカテカ、ギンギラの下派手な柄が多く、お世辞にもセンスがいいとはいえない。しかし、私は決してそれを笑うことができない。高い品を贈れないのだから、せめて包装紙だけでも派手にしたいという気持ちがよく読みとれるのだ。それは、包装紙だけの問題ではなく、日常生活の至るところで見られる傾向だ。

彼らを見てみると、上つ面を飾り立てる「ミエ」とか「やせ我慢」は、止めようがない人間のサガではないかという気がする。彼らに金があれば品のいい美しい包装紙を使うだろうし、もつと金があれば中身も外もさらに豪華に飾りたてるだろう。彼らとの付き合いでわかったことと言えば、「目の前に物があつて、そしてそれを手に入れる経済力があれば、人間の贅沢志向とか利便を求める欲求は止めどがないのではないか」ということだったのかもしれない。

ところで、私が日本を留守にしていた二年間で大きく変わったことといえば、「茶髪」と「携帯電話」がめつたやたら増えたこと。茶髪はともかく、携帯電話は熱狂的な愛好者もいれば、極端に毛嫌いする人も多いようである。新幹線の中ででつかい声で緊急（らしい）ビジネスの話でもされると、「そりゃ便利だろ

う」と思う一方で、「携帯電話を持つほど忙しいことがそんなに嬉しいのかい」と悪態の一つもついてやりたくなるし、通勤帰りの電車の中でOLが「元氣？じゃあねえ」風な会話をしているのを聞くと、「近頃、便利のレベルが贅沢になってきたなあ」とつくづく思う。

これは、やはり、いい徴候ではないと思う。

4

「もつたいたい」と

「我慢」の限界

帰国を前にした引越しの荷造り。テレビやベッド、ソファ、書棚、食器棚、ガスコンロなどの大物はすべてレンタルだから問題ないが、二年間の生活で買い集めた民芸品や日用品はかなりの数に上る。二三〇mの大邸宅に散りばめられた諸々の生活用品のすべてを一〇〇mの兔小屋に持ち帰るわけにはいかない。絞りに絞つた持ち帰り品を除くすべての品を、我が家の三人の使用人とその友人計四人に分け与えることにした。

日本ではとても着れない南国衣装に少し古くなったワイシャツやズボン、食器にサンダル、プロパンガスボンベ、ラジオに使い捨てライター、栄養剤にサロンパス、ボールペン、

乾電池にいたるまで、ズラリと車庫に並べられた文字どおりのガレージセール。次々と各自持参の段ボールに納められ、バジャイ（三輪タクシー）をチャーターして急ぎ自宅に持ち帰る者、いつの間にかやってきた親戚に持ち帰らせる者、段ボール十数個があつという間に消えてしまう。

この国に在ると、「もつたいたい」という情景に頻繁に遭遇することができる。私たちが古くなったと感じるレベル、あるいは消耗したと感じるレベルよりも一段二段低いレベルまで使い切つてしまおうとする。

しかし、私たちは彼らのそのリサイクル精神を範とすることはできない。新しい物を買いたくても金がない。物資も豊富なわけではない。日本人が二年前に買ったお古でも、彼らにとつてみれば、まだ充分、高級品と見なされるといふだけの話だ。

彼らの「もつたいたい精神」を見てみると、むしろ、人の物資に対する止みがたい執着心すら感ずる。

月収三〇万ルピアの公務員ですら、車を欲しがらる。中にはタダ同然で手に入れたであろうポンコツを乗り回す者もいるが、一、〇〇〇万ルピア（約五〇万円）もするだろう立派な中古車を購入する者もある。副業・賄賂・泡銭をかき集めてもせいぜい月収一〇〇万ルピアに満たない者がである。

私の家庭車の運転手は、娘のために三〇万
ルピアも出して台湾製の自転車を買った。イ
ンドネシア製ならば一〇万ルピアで手に入る
のだが、それでは隣近所に恥ずかしいし娘も
肩身の狭い思いをするからだという。五〇万
ルピアの日本製を買えなかったのが心残りだ
と溜息をつくのだが、五〇万ルピアといえ
彼の月収のほぼ一カ月分に相当する。

私たちから見れば、「そんな無駄金を使う
くらいなら将来に備えて貯蓄すればいいの
に」という気がするのだが、彼らはそんなこ
とに頓着しない。金が少しでもあれば、何か
物を買う。それも、少しでも高級そうな物、
ミエの対象になる物という具合だ。そういう
性向は私たち日本人にも充分、思い当たるフ
シがある。人種を越えた「物」に対する止みが
たい執着といったものを、文明の原風景の中
にいとより一層感じることができるといえる。

私たち日本人には、「所有に対する欲望を
最小限に制限することで、逆に内的自由を飛
躍させる」という清貧の思想があった（中野孝
次、清貧の思想）という。そして、近頃も
つたいたいという気持ちが無くなったとい
うことがよく指摘されるが、もともとそうい
う考え方はやむに止まれぬ経済状態がさせた
もので、自由な経済状態の下でそれを望むの
は無理ではないかと考えるのが自然ではない
だろうか。

だとすれば、環境対策の切り札の一つとし
て、人間一人ひとりの自発的な意識の改革を
求めるという方策に多くを期待することはで
きないであろう。

ところで、「もつたいたい」といえば、彼ら
の食事マナーは目に余る。せつかくのご馳走
を大胆に残すのだ。日本人ならば、「お百姓
さんに申し訳ないから」とか「作った人に悪
いから」とか、たとえ食べ過ぎで腹をこわそ
うとも残らず平らげるのが子供の頃から教え
られた最低限の礼儀である。

「せつかくのご馳走を平気で残すとは、な
んて傲慢な連中だ」と最初は思っていたが、
聞けば、残すことが「堪能しました」という
意思表示なのだという。

考えてみれば、日本型の「残さず食べる」ス
マイルだと、作り手はさらに量を多く作らざ
るを得ないだろうが、インドネシア人のよう

に大胆に残すと次からは量を少なく押さえよ
うとするだろう。飽食の時代と言われる現代
ではむしろインドネシアスタイルのほうが合
っているのかもしれない。

ごみ対策にしても、「ごみを出さない」こと
が熱心に論じられているが、まず基本は「物
を作らない」ことだということをこころで真
剣に考えるべきかもしれない。

だいたいが、「残さず食べる」とか「物を大
切に」という発想自体が富める者の傲りであ
ると言えないこともないのではないかと。

そう思うと、ごみブーム以来、パーティの
挨拶の定番になった「みなさん、ごみを出さ
ないように残さずご馳走をいただきませう」
という言葉に素直に喜べなくなったので
ある。



バナナの花と実。「南国ではいたる
所にこういう果物が自生している
から彼らはあくせく働く気になれ
ないのだ」というのが日本人のお
おかたの意見だが、それはそれで
すばらしいことではないかという
発想が、いま、求められているの
かもしれない

5 負担の重さ

ごみ処理手数料の有料化が話題になってい
る。北海道伊達市が一九八九年から導入し、
三七%のごみ減量に成功したということが報
告されて以来、全国的に注目され、ごみ減量
の切り札と見るむきも多い。

実施自治体の結果を見ると、導入当初
はたしかにかなりのレベルで下がっている
が、その後の伸びは相変わらずで、結局は二、
三年分の伸びを抑える程度という急場しのぎ
にはなっても、抜本的な対策にはほど遠い傾
向も見えるようになってきた。

なぜだろうか。

現在、多くの自治体で採用している収集袋
あたりの金額はせいぜい一袋三〇円から六〇
円というところ。中には一定量を超えた場合
に限って一袋一〇〇円を越える例もあるが、
平均すればさほどの金額にはならない。

実際に収集・処理・処分に必要な費用は一
袋二三〇円（五kgとした場合）程度*である
から、有料化といっても実費用のせいぜい四
分の一程度にしかならない。「税金の二重取
りではないか」という批判をおもんばかった
結果だろうが、負担の重さという点から考え
ればインドネシアには遠く及ばない。

有料制による負担額を平均日本人の収入に
対する比率としてみるとわずか〇・一%にも
満たない²⁾が、インドネシアの場合は政府の
方針として一%を目安にしているという。エ
ンゲル係数が大きく異なる両国の経済レベル
を勘案すれば、負担感ほさらに大きくなるで
あろう。しかし、インドネシア人と比べると
ごくごく軽いこの負担も、住民のコンセンサ
スを得て導入するまでには大変な労力を要す
るという。

「日本はごみ処理に金を使いすぎか」と聞
いたなら、多くの日本人は「そうだ」と答え
るだろう。古いデータだが総理府が一九八八
年に行った「ごみ処理に関するアンケート」
によれば、国民一人あたり約八、〇〇〇円
かかるごみ処理費用³⁾について「高すぎる」と
感じた人は約三二%にも達するという。当時
は八、〇〇〇円だった費用が現在では一万八
〇〇〇円（一九九三年度）にも達しているわ
けだから、今ならその比率はもつと高くなる
かもしれない。

はたして我が国のごみ処理費用は高すぎる
のだろうか。自治体の全体予算に対する清掃
費用の比率は一九九三年度の実績では平均約
三%であるが、インドネシアのそれは六く
七%といったところ³⁾。

決して高くはないのである。
こう見てくると、有料化の負担にしても清

掃予算にしても、私たちの経済レベルからす
るとあまりにも軽すぎないだろうか。そして、
さらに言えば、私たちはその軽さに対してあ
まりに「重い」という意識を持ちすぎではない
だろうか。

この、言ってみれば、被害者意識が強く、
それでいながら六〇円や一〇〇円の小銭には
ビクともしない経済力を誇る国民に対して、
有料化などの経済手法がはたして有効なのだ
ろうか。

少なくとも、現在、試みられている程度の
負担では効果がない、と言いつつしてしまつて
もいような気がする。

*厚生省資料によれば、ごみ一tあたりの処
理費用は一九九三年度実績で四万五、三九
〇円。一袋五kgとすれば、約二三〇円とな
る。



天ぶらの行商をして
いる青年。その場で
揚げてくれる。油の
質にさえ注意すれ
ば、まず危険はない。
イモ天は日本人好
み。バナナの天ぶら
は娘の好物だった

6 義務のリサイクル

ジャカルタ近郊にある一〇八ヘクタールの広大な最終処分場。人口が実質一、〇〇〇万人を越えるのではないかともいわれるジャカルタ市の大部分のごみがここで処分されている。

この埋立地を視察するのはちよつとした勇気がいる。日本と違って生ごみをそのまま埋立てしている上に、なにしろ南国。ひどく臭いし、ハエの発生も並みではない。車の窓をしつかり閉めているとはいへ、写真を撮るためにドアを開けたり窓を下げたりするたびに、ハエがどんどん進入してくる。いったんハエが入ると、その埋立地を離れるまでどうしようもない。ごみの山にたかっていたばかりのハエに顔のあたりをまわりつかれるのは楽しいものではない。

それ以上に恐いのはスカベンジャーだ。ごみの中からリサイクル資源をあさっている人たちのことで、文字どおり老若男女、常時一〇〇〇人近い人たちがごみの山の中で格闘している。

虐げられた人たちの集団心理についてはうんざりするほど講義を受けてきた知識からすると、決して近づいていけない場所ではある。

なにしろ、むこうはごみを集めるための籠を背負い、ぼろ服を身にまとい顔も汚れて斑になつてゐるのに、こちらはネクタイはしないまでも一応はきれいなワイシャツに革靴で、彼らが働いている側を車の窓を閉め切つたまま悠々と走っている。ぶん殴つてやりたईと思つてゐるだろうなあと感じることも少ししば。

いつだったか、雨季で道路が水浸しの時、彼らが働いていると真ん中でエンストしかけたことがあつたが、生きた心地がしなかつた。日本人専門家、ごみ埋立地で撲殺さる！なんていうのは格好悪いなあ、親は肩身が狭いだろうなあ、子供は学校でイジメにあうかもしれないなあ、これを機会にODAのあり方を見直せなんていう論評が出てきて困るなあ。いろいろ考える。

一度だけ、彼らと身近に接したことがある。埋立地で試料を採取した時のことだ。頼みのインドネシア人パートナーは私が懸命にスコップを振るうのを遠巻きに眺めるだけで頼りにならない（彼らエリートはそういう肉体労働をしてはいけないことになつてゐるのだ）。スカベンジャーたちが物珍しそうに私の回りに集まつてくる。子供がほとんどだ。しかし、私も作業服を着て、汗みどろでごみと格闘している。彼らの反発を買うことはないだろう。そんな安心感はある。ふと見ると彼らの顔に

同情の色が浮かんでゐる。「このおじさん、立派な作業服を着て金持ちだろうに、ごみを相手に何をしてるんだらう」という感じなのだ。

採取したごみをプラスチックの袋に入れ、「スター（終わった）」と言うと、子供たちがいつせいに寄つてくる。初対面の握手を求めてくる子供もいれば、名前を名乗る者も、「子供、何人いるの」と場違いな質問を浴びせる者もいる。間近に顔を見ると、垢がこびりついてはいるが表情が穏やかで屈託がない。写真を撮ろうというと、さらに二、三〇人の子供が集まつて、「1・2・3」の合図でいつせいに飛び上がる。いい記念になると思われたその写真に、結局、私の顔が見えていなかった。

彼らスカベンジャーの多くは埋立地の一角に掘建て小屋を作つて生活している。一家揃つて暮らしている者もいれば、家族を田舎に残し、仕送りをしてゐる者もいるという。

彼らの集める資源ごみはといえば、プラスチックとか布が主体。金属や紙という金になるごみはずでに家庭のごみ箱で集められてゐる。軽やかさばるプラスチックを一日集めたとしてもどれだけの金になるのだろうかと思ふのだが、それでも彼らの収入は薄給に泣く公務員の上をいくという。

衛生状態は最悪だ。泥水の中をサンダル履

途上国の現状

きという者も多く、破傷風は、肝炎はと思うとゾッとする。せめて安全靴を履くことを義務付けるべきではないかということを進言するのだが、彼らの存在は非公式、見て見ぬ振りの存在なのだから、そういう指示はしにくいのだという。

雇用機会の極端に少ないこの国で、職を持つとうとすれば高い教育を得るかコネに頼るか。私のパートナーの一人は母親が文盲なれど、最難関の大学を奨学金で卒業したという稀な存在。そういう極端な頭脳もなく、コネもない多くの人々が生計を立てるには、悪の道に走るか泥にまみれるか。スカベンジャーは最も真摯に生きようとしている人々の代表かもしれない。

彼らの仕事はリサイクル。間違いなく地球環境の保全、資源・エネルギーの保護に大きく貢献する仕事である。しかし、その言葉は軽すぎる。彼らの行動は生きるための営みであり、その営みには生への執着がある。

たしかに日本も現在はリサイクルブームではあるが、しかし、そこには生活の二オイは感じられない。せいぜい子供のクラブ活動の資金稼ぎという程度で、多くは地域の衛生のため、あるいは地球環境の保全のためという、頭で理解させられた義務感があるだけだ。義務感の力というのはどの程度だろうか、それはわからないが、彼らの生きるために必死な

様子を見た後では、義務のリサイクルには限界があるのではないかという一種の絶望感を禁じ得ないのである。



埋立地の子供たち。大人たちに混じって資源拾い。発泡スチロールは彼らの遊び道具

7 〱ほどほどに〱の

レベル

豊かさは麻薬と同じである。なければならぬで済むことなのに、一度その味を知ってしまったら、理性で元に戻ることは不可能である。物質文明という名の麻薬が徐々に顔を見せつつあるインドネシアで暮らし、そこに住む人々と親しく接した後で思うことは、一度その虜（とりこ）になってしまったら私たち一人ひとりの意思や努力ではもはや元に戻ることはできないだろうということである。〱ちよつと我慢〱、〱ちよつと努力〱、〱ちよつと工夫〱といった痛みを伴わない対策、合意形成を得やすい対策だけでは、おそらく大きな成果を上げることができないだろうし、いまだ日々刻々進展している物質文明のスピードにすら追いつくことはできないだろう。

私がいた二年間でも、インドネシアの街並みは大きく変貌を遂げたし、店舗の品数も着実に増えている。中国、インド、インドネシアという、三国で地球人口の約四〇%を占めるアジアの国々がこのままの経済発展を遂げ、いま私たち日本人が謳歌している物質文明の洪水に浸り始めたらと考えると空恐ろしい気持ちになる。

直接的にいうと生活レベルの低下を伴う環境対策、あるいは麻薬を強制的に排除する環境対策、そんな時代がやってきたのかもしれない（図4）。

どのくらい的生活レベルを目標にするかということになる、たとえば埋蔵資源量の把握、代替エネルギーの開発の見込み、個々の物質の環境負荷の試算が必要だろうし、目標を何年先に置くかということも大切なことだろう。さまざまな要素が複雑に絡み合い簡単なことではないが、ここに興味深いデータを紹介したい。

図5と6は、GNPと乳児死亡率あるいは平均寿命の関係を示したものであるが、一人当たりGNPが五、〇〇〇〜一万米ドルを越えたあたりから乳児死亡率や平均寿命はほぼ変化がなくなっている。また、図7によると、エンゲル係数も一万ドルを越えたあたりから大きな差異が見られなくなっている。つまり、GNPが一万ドルを越えれば、命のレベルも変化がないし、食うのにも困らないということが言えようか。

一方、図3はGNPと紙消費量の関係を示したものであるが、GNPが一万ドルを越えたあたりからGNPのレベルに応じて急激に増加している。日本のGNPはすでに三万ドルを越えているが、このあたりがひとつの目安になるのかもしれない。

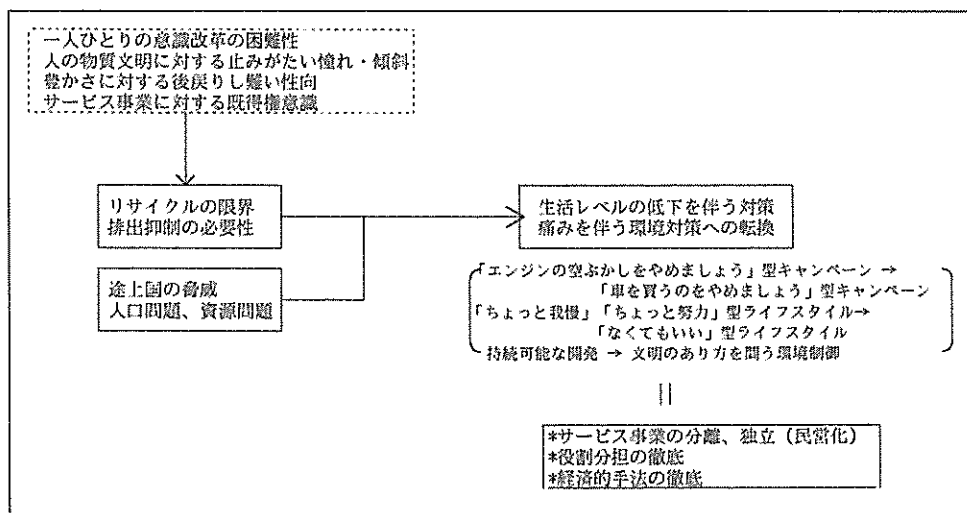


図4 痛みを伴う環境対策

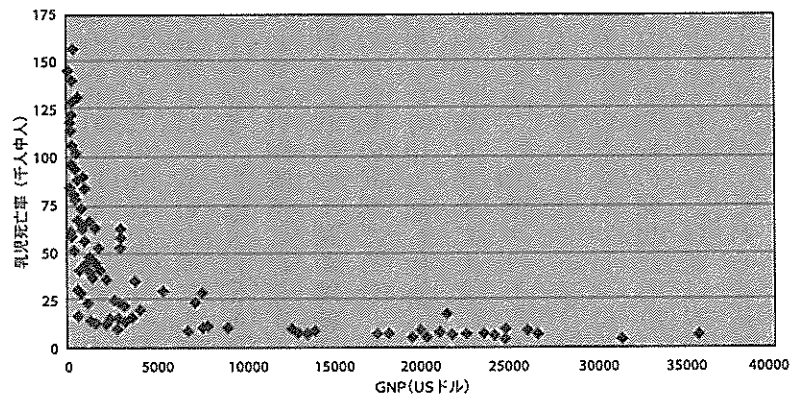


図5 乳児死亡率とGNP

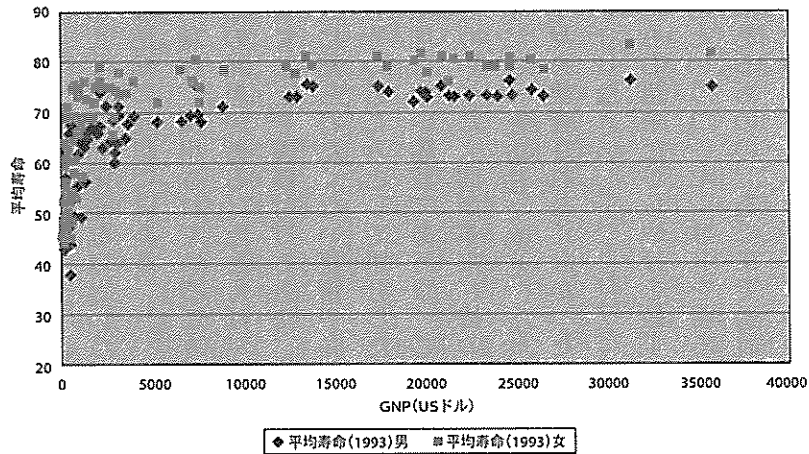


図6 平均寿命とGNP

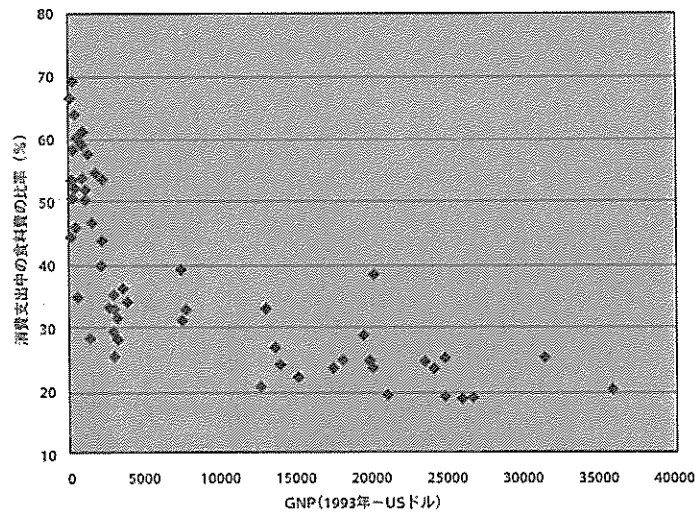


図7 消費支出中の食料費とGNP

8 逆転の発想が

もたらしたもの

逆転の発想——通常は肯定的な言葉としてとらえられている。近代日本の高度成長を支えたのもこの発想かもしれない。

見渡せば、身近な所にも逆転の発想がいくらかもある。たとえば宅配便。本来、小回りが必要な近距離用に存在するはずのトラックを鉄道に代わって遠距離輸送に利用するというのは逆転の発想だろう。高速道路の普及と利用したり積み卸し作業の効率アップなど、独自の工夫はあるにせよ、エネルギー効率を犠牲にして、顧客サービスに徹した結果であるろう。

食品と容器をいっしょにして商品化するというのも逆転の発想だろう。本来、食品は食品として存在し、容器は容器として存在しているはずだが、それらを込みにして商品化するという発想はすごいと思う。容器を洗わなくてよいとか衛生管理に優れているとかレジ操作が簡単とか消費者のニーズを上手くくい上げてはいるが、ごみ処理は夕夕でおまけに何でも出していいという自治体のサービスを既得権として逆手にとったズルイ発想では

あるだろう。

ムシのいい発想と言えば自動販売機が典型だろう。生計は働いて稼ぐものだという本来、当たり前であったはずの考えを覆し、消費者のニーズにも販売者のニーズにも見事に合致している。機械を作ることにも痛みを感じないし、エネルギーを消費することにもとらえずは誰も困らないという、たしかに完璧な逆転の発想ではある。

現在、採用されているごみ対策の中にも逆転の発想がある。たとえば、ごみ袋に名前を書くことを義務付ける方法。人間には誰しも人に知られたくない秘密や恥部がある。それをそつとごみとして処分したいということは無理のない願望であろう。ごみ袋の記名制はそういった人間が本来、持っている恥部を逆手にとった方法である。恥ずかしいごみの中身を検査されなくなったらきちんと分別を守りなさい」というわけだ。分別があまりにもお粗末だからやむを得ずやっている方法だというコンセンサスを得るための大義名分はあるものの、あくまで過渡期の対策であると位置づけられるべきであろう。

たとえば、公園にごみ箱を置かないということ啓発の一環として試みているケースがある。弁当殻や空き缶の散乱に悩まされている公園が、ごみを持ち帰ることを前提としてごみ箱を設置しないという発想はやはりすこ

いと思う。しかし、所有する土地のごみを処理するという義務を放棄してまで環境教育を押しつけるのはあまりに強引すぎないか。それは、かつて、自ら作り出した廃棄物を処理するという当然の義務を怠ることによって多くの製品を安く作ってきた生産者たちの発想とどれだけ違うといえるのだろうか。

もちろん、反論は成立するだろう。

「ごみは本来、自分自身で処理するものであって、自治体はただ単にサービス事業としてやっているだけではないか」。

考えてみれば、ごみ処理を自治体のサービス事業として位置づけて、自治体自身が集め処理するという考え方そのものが逆転の発想の最たるものかもしれない。

ごみは本来、排出者自身で処理すべきものである。それを自治体のサービス事業としてやってくれば住民にとってこんなありがたいことはないが、筋としてどこかおかしい。衛生状態を改善するために自治体の固有義務としたのであれば、あくまで過渡期の対策であったと考えるべきであろうし、衛生状態が飛躍的に改善した現在も住民側の既得権として存在するのは正しいこととは思えない。なによりも、本来、個人が個人の責任でやらなければいけないことを自治体が行ってくれるという逆転のシステムがまかり通っているのは不可思議だ。

先の記名制の問題も、自治体のサービス事業の中で名前を書くという犠牲を強いるから無理があるのであって、本来、自分自身でするものであるのなら、何らかの義務が生ずるはずだ。

公務員のことを「公僕」、あるいは「Public servant」と表現するようになったのはいつのことだろうか。「お上」という悪しきイメージを払拭するための手段であったとすれば、それも逆転の発想に違いない。

自分自身で処理するにしても、これだけの都市集中。自宅にこみを埋める場所もないし、個人で処分する場所を探すのも難しい。まして、これからは高齢化社会だ。どうすればいいか。自分自身でできないことは、必要な経費を払って業者に委託するというのが、資本主義の枠内では普通の方法ではないか。「お上」はそれが適切に行われているかどうかを監視するというのがやはり普通の考え方もしれない。

中には経済的な理由から、あるいは体力的な理由から、対応できない人も多いだろう。しかし、それは福祉の問題である。「福祉」と「サービス」は異なってしまうべきだ。

当然、人々の負担が増えるわけだから簡単には許してもらえないだろうが、このような痛みの伴う環境対策は遠からず必要になるのではないだろうか。

平成に入ってから急激に話題を集め始めたごみ問題。「ごみ対策」「リサイクル」というイメージが定着すればするほど、本来、最優先されるべき生産量を減らすということが忘れられるという傾向は否定できない。

いつか、途上国発資源エネルギー問題という外圧がせつは詰まった状態で押し寄せてきた時、やつと痛みを伴う環境対策へのコンセンサスができあがるのでは、もう遅すぎるだろう。

「今のうちに」という気持ち強いのだが、私自身、帰国してからすでに一年半、道行く人々を見ても、帰国当初の違和感を感じなくなっている。すでに豊かさ慣れという慢性病に侵されつつあるのかもしれない。自分自身が決して裕福だとは感じなくなっているし、これ以上、経済的な負担を課されるのはごめんだという気持ちもないわけではない。

このまま、完全にインドネシアの記憶が消失してしまわないうちに書いておきたかった。乱暴な表現があったとすれば、いまだ海外生活の後遺症が残っているということでお許しいただきたい。

(おおさわ・まさあき)

表情豊かなインドネシアの女性たち



〈参考資料〉

- 1) 小林康彦 「ごみ問題は『衛生』から卒業したのか」 公衆衛生 Vol.59, No.1, P58
- 2) 大澤 「途上国を見る 途上国から見る」 都市と廃棄物 Vol.25, No.12, P27
- 3) 増田直美 「南の国の廃棄物統計」 生活と環境 1996.4